東アジアにおけるトランスカルチュラルの考察

―京都祇園祭における中国の影響と地方への伝播を手がかりとして―

A Study of Transculturality in East Asia: Chinese Influence on the Gion Festival in Kyoto and its Spread to Local Areas

島根県立大学国際関係学部准教授
中村　圭 NAKAMURA, Kei

1. はじめに

2016 年 3 月，京都に文化庁が移転することが正式に決定した。京都が移転先としてふさわしい理由として京都市は「有形・無形の文化財を数多く有するとともに，日本の歴史，伝統，文化，心を真に受け継ぐ都市」であることを強調した[i)]。

その京都を代表する祭礼が祇園祭である。祇園祭は，東京の神田祭，大阪の天神祭とともに日本三大祭りのひとつとしてあげられる。祇園祭は 1 か月にわたって八坂神社の氏子地域でさまざまな行事がおこなわれるのだが，その中でもっとも知名度が高いものが山鉾巡行である。2009 年には日本を代表する祭礼として認められ，ユネスコ無形文化遺産にも登録された。その祇園祭の山鉾のひとつが，実は，14 世紀の室町期に大陸より渡来してきたひとりの中国人によって創設されたことはあまり知られていない。

一衣帯水の隣国である日中間には，深遠かつ濃厚な文化的交流の歴史が存在する。漢字, 干支, 暦, 囲碁から餃子，ラーメン，タピオカまで，日本社会に存在する多くのもののルーツは中国にある。これらは千年以上，脈々と続く日中間の人的交流の歴史の賜物であり，中国を中心とした東アジア文化の影響は日常的に隅々にまで浸透して日本社会や文化の基層を成している。一方で，あまりに浸透しているがゆえに，今日では多くのものが日本「固有」のものと認識されてしまい，その由来を忘れ去られるような状況がしばしば発生する。

記憶に新しいところでは「新元号の『令和』がはじめて日本独自の典拠である万葉集から引用された」と正式に発表された際には，「万葉集は日本『独自』のものか？」との異論がまきおこった。「令和」の典拠となった 8 世紀の日本で詠まれた歌には，4 世紀に今の中国浙江省紹興市で詠まれた王羲之の「蘭亭集序」が背景にあり，それらは万葉集が編まれた時代の日本の高貴な人々にとって当然とされた教養であったためである。

古より日本では儒教などの中国思想や，杜甫や李白など文選に収録されているような中国の詩文は，ある程度以上の階層の人々にとっては必須の教養であった。「令和」の議論は，このような教養の背景を忘れ去られていたことで「万葉集」が日本独自のものと認識されたために異論が巻き起こったものであった。

品田悦一（2019,2020）は，万葉集の作者層が幅広く「天皇から庶民まで」にわたるというのは，明治中期に国民国家日本の建設という国策に沿って人為的に作られた幻想」であり，それらが戦争遂行のための国威発揚に利用され，万葉集が文化装置として利用されたことを指摘する。少なくとも明治期までは，日本の教養人の間には，文明の

先進国であった中国思想や文化への敬意や憧憬というものが常に存在していた。

一方で，中国思想や教養，文化が日本へと伝播した経緯，その経路や媒介者が歴史として明確に記録されて日本社会に根付き，日本を代表する文化や伝統として地方各地に伝播されたこと，さらに時代を経て今なお継承されていることが実証できるケースはあまり多くはない。本稿は，その数少ない事例のひとつである。

西原和久は「空間的には『国境』を越え，かつ時間的には『世代』を越えつつ，文化的に越境する実践と実践知を活用して，これまでには明示的に・現実的には必ずしも存在しなかった「社会」や「文化」を，「共振・共鳴・共感」に基づく共同で（＝相互主観的に）産出するような越境にある」現象について研究し（2018:240），そしてその具体例としてトランスナショナルな「移民的越境者」をテーマに議論を展開した。本稿は，同じテーマを 14 世紀に中国から渡来した文化的媒介者が創立した京都祇園祭の 1 山鉾を事例として，その後 600 年以上にわたる文化の越境と地方への伝播を通して脱文化主義（transculturalism）を論ずる試みである。祇園祭を題材として中国の影響から脱文化主義までを語ろうとする立論は，いささか壮大すぎるために雑駁な議論となってしまうかもしれない。しかし「万葉集」が日本固有のものだと「勘違い」しているように，日本を代表する祭礼である祇園祭も，中国だけでなく越境したさまざまな渡来の文化の影響を色濃く受けて構築されているのだ。

すでに多くの論考で祇園祭が中国文化の影響を色濃く受けていることは述べられている（玉村 2018 ほか）。実際に，大陸との直接的な往来が不可能であったはずの江戸期に制作されて現存している多くの山鉾の装飾をみれば，当時の，いわば人間国宝級の職人たちの手によって龍や四神のモチーフが，異国情緒を帯びて色鮮やかなチャイニーズテイストな仕上げになっており，中国の美が，いかに調和をもって日本の美意識のなかに溶け込んでいたのかがお分かりいただけるだろう。

トランスカルチュラリズムに類する議論には，文化（的）越境（transculture, crossculture），文化融合（mixculture），文化的混淆性（hybrid・hybridity），トランスナショナル（transnational, 跨国家／越国家）などがある。そして現在，日本のトランスカルチュラリズムにかんする議論は，主としてグローバリゼーションの深化に伴うマルチカルチュラルな現象が分析の対象である。そのため教育および経営分野にかんする研究が主な領域となっている。だが日中間の文化的媒体者とその地方への伝播について，トランスカルチュアルな文脈において詳述されている論考は管見の限りみあたらない。東アジアで複雑に越境し，融合する文化的な現象について，東アジアとの交流およびその重層性を実証すること，またそれらが，いかに地方まで伝播したのか，という現象にかんして，現在に至るまでの連続性を関連づけることは極めて難しい。京都祇園祭は歴史の記録が豊富に残るために，その実証が可能となる。

西原の論考に戻ろう。西原はトランスカルチュラルについて「国民文化」やそのもとでの集合的文化の固定化を乗り越えるトランスカルチュラルな視点に立つこと，またそのための文化的媒介者の重要性を指摘する（2018:291）。本稿もその視点に立脚する。主として 14 世紀に中国から渡日したある文化的媒介者の存在とその子孫たちの活躍を通して，日中間で綿々と受け継がれてきた交流の中に埋め込まれた文化を再認識し，そうすることで日本文化の固定化を打破し，現在へと連なる文化的越境の視点を論じていく。

「日本独自のもの」という言説はナショナリズムと親和性が高い。なにかの契機により，いとも簡単にナショナリズムの嵌入にはまってしまう可能性がある。文化が伝播し，境界（国境）を越えるプロセスを丁寧に見ていくことによって日本文化の固定化から脱却し，脱文化主義を語ることが可能となろう。

祭礼は「神遊び」とも言われる。美しいもの，楽しいことは容易に「共振・共鳴・共感」を呼び起こし，軽々と「越境」をする。祇園信仰は祭祀とともに日本の各地へと伝播し，現在でも博多祇園山笠など「祇園」と冠する祭礼が日本各地に存

在している。そしてそれらと共に「小京都」と呼ばれる地域が日本の各地に生まれ，新たな観光資源として活用されている。美しいもの，楽しいことに「共振・共鳴・共感」することで越境・伝播をたやすくさせ，それぞれの国や地域で土着的で新たな趣が付加されることで新たなイノベーションが創出され，地域活性化への文化資源となる。本稿の事例は，現代まで綿々と続く東アジアの文化的越境を再確認するだけではなく，新たな文化資源の開発やイノベーションの可能性を探る契機となるはずだ。

2. 祇園信仰と京の町衆，装飾品

2－1　祇園祭の起源と京の町衆

祇園祭（祇園会）の起源は 8 世紀の平安京に遡る。貞観 11（869）年，全国に疫病が流行したときに，当時の国数に応じた 66 本の鉾を立て，悪疫退散の祭礼を行った祇園御霊会が起源と言われる[ii)]。その後，祇園祭は人の往来が頻繁な都の宿命，外来の人々からもちこまれる未知の疫病退散を祈念するものとして定着し, 広く信仰を集めた。祇園祭は本来，渡来の神様である牛頭天王を祀る八坂神社の神事であるが，山鉾行事は，室町時代から続く町組を単位とし，町衆による民間私祭としてはじまった。その基本的な形式は室町期に形成され, 現在にいたるまで維持継承がされている。

山鉾を擁する町は山鉾町と呼ばれ，祭りを担う人々は，町衆（ちょうしゅう）[iii)] と呼ばれた。町衆とは，元々は 15-6 世紀頃に町の生活者となった没落公家衆が，町に住む商・手工業者を総称した呼称であった。しかし町衆たちも公家衆のもつ豊富な教養から影響を受け，公家衆とともに地域的な集団生活体を組織し，経済性と文化性を持った人々がその町中で育て上げられた。十六世紀中頃，天文年間以降は，次第に上層町衆は特権商人となり，上層の家持層と借家人層の階層分化が強化された。上層町衆には三井家などの財閥につながる商家があり，江戸時代には地方の藩邸も山鉾町内に居を構えて山鉾行事のスポンサーとなり祇園祭を担った。

山鉾町は，明治初期まで不動産所有売買権・居住転出入許可権等を保有し，およそ裁判権と警察権以外の自治が町に任され，自治にかかわる細目を定めて，有力な町衆の合議制で意思決定を行っていた。転出していく者の不動産を町で買収し，新たな住民を受け入れるかどうかについては町内で審議が行われ，町の住民としてふさわしい人が見つかるまで空き家は「町中持」として住民が合議の上で管理をした。山鉾町に住まう人々にとって祭は大事な町の神事であり，山鉾町に住まうことは京の町衆として祭礼を担う義務を持ち，それ自体が名誉であり威信でもあった。

幕末から明治維新にかけてのドラスティックな制度改革により，町のもつ機能は激変したが，現在も各山鉾行事の運営は，それぞれの山鉾町を基本とした保存会組織によって担われている。

現在，京都祇園祭山鉾巡行への参加が認められているのは応仁の乱（1467-1477 年）後に再開された 1500 年の祇園祭山鉾巡行に参加し，その際の名称（なんと呼ばれていたか），町籍（どの町が所有していたか），風流（山鉾の故事および装飾）が明確な 35 基に限定され，それぞれの町をベースとした保存会組織によって独立運営されている。大火や洪水などで二百年間，巡行に参加できなかった山鉾も「休み山」として参加資格を維持され，我が町の山鉾として復興の機会を窺い，山鉾町の伝統と誇りを頑なに守り続けている。

祇園祭の山鉾は，現在，日本各地の祭礼でみられるあらゆる山・鉾・屋台の形態が網羅されている[iv)]。繰りかえすが疫病退散を祈る牛頭天王を祀る祇園信仰とともに「祇園」と冠する神社，祭礼が日本各地に数多く伝播しており，その文化的影響は計り知れない。

2－2　山鉾を飾る豪華絢爛な懸装品

年に一度の山鉾巡行は，豪華絢爛で意匠を凝らした懸装品で飾られた山鉾のお披露目の場となる。祭礼は各山鉾町の町衆同士の財力やコネクション，目利きを競い合う場になった。京の富裕な商人たちは競うようにして, 国内はもとより「鎖国」時代にも海外で制作されたタペストリーなど

を手に入れている。それらはお金を出すだけでは，決して手に入れられないような貴重な品々であった。また明治維新まで，京には天皇が住まい，御所や公家御用達の美術工芸，染色，刺繍，織物，飾り金具等を制作する第一級の職人たちが集住していた。職人にとって祇園祭の装飾品が制作できることは栄誉であり，自分の死後にも自らの精魂込めた作品が残され，山鉾を装飾することを信じて祇園祭のために奉仕をした。山鉾町に住まう町衆たちは，山鉾の装飾品を分担して保管し，大火の際には率先して持ち出し，自分たちの町の宝物を守り抜いた。

そしてそのデザインについてだが，当時の人々は，それが何なのかよくわからずとも，「異国情緒」を感じられ，美しいものである，と町衆の目利きに叶ったものは認められてとり入れられた。それらは時の名匠によって巧みに制作され，山鉾を飾る懸装品と作り変えられている。美しいものは，それがどのような意味をもつのものかがわからずとも，受容されるのだ。

現存している山鉾の懸装染織品は，主に 16 世紀以降に渡来または制作されたものである。中国大陸文化圏，朝鮮半島，印度，中近東，欧州より渡来した染職品，京都で特別に誂えた錦織，綴織，友禅染に刺繍を施したもの，金工芸品などである。つまり，祇園祭の山鉾を飾る懸装品は，世界の至宝とも言える一級の美術品が使用されている。一例をあげると，江戸期より南観音山という山鉾を飾っていた印度更紗は，ニューヨーク，トロント，オランダの美術館に所蔵されているものと同類である。また他にも，ムガル時代のインドやペルシア最盛期の逸品といわれるイスファハンで織られた絨毯など，世界でも数点しか残存していない貴重なものが使用されている。そのため祇園祭祭礼期間中には世界中の美術館の学芸員や研究者が調査のために渡日する。祇園祭山鉾巡行の豪華絢爛さは「動く美術館・博物館」とも称される。

3. 祇園祭における中国の影響と蟷螂山

3－1　山鉾風流のなかの中国文化

祇園祭は八坂神社の神事であるが，山鉾行事は町衆の祭（神事）である民間私祭としてはじまり，町固有の土着的な祇園信仰となった。各山鉾町によって風流が定められたので，御神体や御利益などそれぞれバリエーションに富んでいる。風流は，能や謡の演目にあるような故事が多いのだが，中国の故事や伝承に由来するものは祇園祭の 35 の山鉾のうち，9 基ある。

図表 1 は，山鉾風流のなかにみられる中国文化についての一覧である。

本稿の事例となる蟷螂山は 14 世紀後半に創立

図表 1　山鉾風流における中国由縁

	山鉾名	中国由縁の故事や人物
1	函谷鉾	斉の公族，孟嘗君
2	菊水鉾	枕慈童（周の穆王に仕えた童，菊水は童の献じた薬水）
3	鶏鉾	尭鼓舜木（尭，舜は中国古代伝説の聖天子）
4	孟宗山	元の郭居業編の二十四孝の一人，孟宗
5	郭巨山	元の郭居業編の二十四孝の一人，郭巨
6	伯牙山	周の時代の琴の名手，伯牙
7	白楽天山	唐の詩人，白楽天（白居易）
8	鯉山	登龍門（竜門は黄河中流にある峻険な峡谷にある滝の名）
9	蟷螂山	梁の昭明太子編の詩文集『文選』の中の言葉 「蟷螂の斧を以て隆車の轍を禦がんと欲す」

出所：『2018 祇園祭』を元に筆者作成

されたのだが，表１にあげられる他の山鉾は，同時期か，もしくはそれよりも早く山鉾巡行に参加していたとみられる。

蟷螂山の風流は，梁の昭明太子編の詩文集『文選』の中の前漢時代の『淮南子・人間訓』に記された「蟷螂の斧をもって隆車の轍を禦がんと欲す」から引用された。斉の荘公が狩りに行ったときにカマキリが前足を振り上げ車の輪を打とうとした。荘公がこれは何の虫かと尋ねたところお付きの者が「カマキリという虫で，進むことしか知らず，退くことを知りません。自分の力量をかえりみず相手に立ち向かっていきます」と答えたところ，荘公は「この虫が人間だったら天下をとっていただろう」と言い，カマキリを避けて車を動かしたという故事に基づいたものである。これは，後述するが当時，町内に在住した四條隆資卿をカマキリにみたて，時の権力に勇敢に立ち向かった姿をオマージュしたもので，その後，京の町衆が時の権力に怯まずに挑む例えとして伝わっている。一方で，残念ながら「蟷螂の斧」の意味については「身の程知らず」「無謀なさま」などと紹介されることも多い。

祇園祭における中国の影響は風流だけにとどまらない。懸装品の織物や金具，欄縁のデザインなど，山鉾のいたるところに龍や四神，唐子の図柄など，チャイニーズテイストのモチーフが使用されている。

3－2　山鉾の懸装品からみる中国文化

祇園祭の山鉾の懸装品には，中国の故事を引用したテーマの図柄や，明・清時代に中国で制作された織物，子孫繁栄を意味した唐子遊図など中国で一般的な吉祥図柄の文様を使用したもので作成された懸装品が数多く見受けられる。写真 1,2 は，祇園祭の山鉾のひとつである黒主山の懸装品である。5 つの爪を持つ龍と唐子遊図が描かれている（写真 1，2）。

蟷螂山の懸装品にかんしてだが，1788 年の天明の大火で焼失して再興したため，現存する最も古いものは江戸時代中期に制作されたものである。当時，日本と中国は長崎でしか交易が認められていなかった。そのため京の職人たちは中国との直接的な文化的交流は皆無であったはずなのだが，1802 年，日本の職人たちによって制作された蟷螂山の御所車は，色彩は赤を基調としたチャイニーズテイストのデザインである（写真 3，4）。唐破風の屋根を持つ御所車の引き手には木彫りの龍，台座には四禽叶図—青龍・白虎・朱雀・玄武の造形が施されている。日本で汎用された御所車の形状と，中国伝来の龍や四神のモチーフや赤の色彩というその装飾は，まさに日中文化の融合が表出されたものである。

蟷螂山は，カマキリと御所車の車輪が動くなど，祇園祭の山鉾としては，唯一のからくりが施されている。からくりカマキリは，江戸期に制作された先代カマキリも現存しているが，現在は，昭和

写真１　5 つの爪を持つ龍

祇園祭 黒主山保存会所蔵　筆者撮影

写真２　唐子遊図

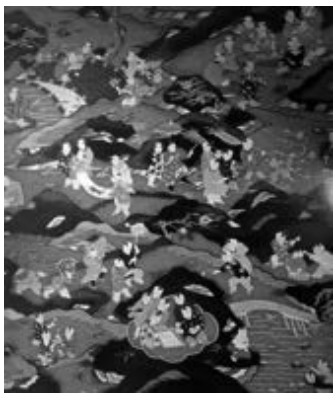


写真３　蟷螂山の御所車・からくり仕掛けの
カマキリと九代 玉屋庄兵衛氏

2017 年 7 月 16 日　筆者撮影

写真４　江戸時代 1802 年 制作　御所車の台座の龍

筆者撮影

の蟷螂山復興の際に，江戸期に京都から名古屋に移り住んだ七代玉屋庄兵衛氏が制作したカマキリを使用，現在は九代玉屋庄兵衛氏率いる玉屋工房の一門が巡行に参加してからくりを操作している。カマキリは，左右のカマ，顔と羽，御所車の車輪が動く木製の精巧なつくりとなっており，中は３名がかりでからくりを動かしている。巡行時は外に１人，司令塔役がおり，内部に無線で動作の指示を出している。巡行は夏，近年は 35 度を超えるような猛暑日もあり，内部はかなり蒸し暑く，動く山鉾の上でずっと上を向いて三人で息を合わせながら動かすために，かなり辛い現場となっている。実際に動作が見えないところで，いかに息を合わせて美しく動かすかについて苦心されているからくり師たちの技術は，それ自体がもう無形文化財なのである。

4. 蟷螂山からの地方への祭礼文化の伝播

蟷螂山の祭礼文化は，その後，15 ～ 16 世紀に森町，17 世紀に久留米へと伝播をしている。さらに平成期には小田原，京都府八幡市とかつて蟷螂山縁起に由来する御縁から人的交流が復活し，現在「時空を超えた地縁」v）が紡がれている。

先述したように現在の山鉾巡行は，14 世紀室町期にその原型が形成され，応仁の乱以前には 55 基が参加していたといわれている。一方で，各山鉾がいつ創立され，いつから巡行に参加したのか記録が残されておらず，その起源や創始者がはっきりしないところが多い。そのなかで，明確に残されている蟷螂山の歴史は文化の伝播をひもとく重要な手がかりとなる。

4－1　蟷螂山の歴史

本項では，蟷螂山の創立から現代に至るまでの簡単な歴史を紹介する。本稿の末尾には蟷螂山歴史年表を添付した。

蟷螂山が山鉾巡行に初参加したのは 1376 年である。四条西洞院上る，現在の蟷螂山町内に在住し，南北朝の争いで南朝に属し八幡男山での壮絶な戦いの上に討ち死にした四條隆資卿の二十五忌に，元の滅亡により渡来した陳外郎大年宗奇が施主となり御魂休めを行い，四條家より御所車の払い下げを受けて大きな蟷螂の模型を乗せて山鉾巡行に初参加した。先述したとおりこの大蟷螂は「文選」にある故事「蟷螂の斧」から引用したもので，このカマキリがからくり仕掛けになっている。

江戸期には，久留米藩有馬家の京都屋敷が現，蟷螂山町の西側にあり，蟷螂山の山鉾の大スポンサーとなった。元禄頃までは東側町内にも肥前国

平戸にあった松浦藩の松浦壱岐守という大名の屋敷があったが，松浦藩の転出後には片側に町人が居住した。

江戸末期，久留米藩の財政事情が苦しくなり，1850 年代後半以降，蟷螂山は巡行を休みがちとなった。懸装品等が，1860 年頃から大津祭月宮殿山，龍門山，祇園祭白楽天山などへと売却された[vi]。幕末，1864 年の蛤御門の変で蟷螂山も被害にあい，有馬家の蔵に保管されていた一部の懸装品と山鉾の部材だけが焼け残った。明治維新後，1872 年までは鬮順があったりなかったりしているのだが，その後は休み山となった。明治期になり，久留米藩藩邸は転出し，蟷螂山は後ろ盾を失った。再建の目処は立たず，焼け残った懸装品のうち，御所車と大蟷螂を座敷飾り用に作り替えられ，残りは売却された。幕末から明治初期にかけて多くの町民は離散，当時，売却側に賛成したものは急死か行方不明となり，祟りであると恐れた町民は，1876 年に錫のおみき徳利を新調，再び山の祭祀を開始した[vii]。

以後，多くの山鉾が復興し相次いで巡行に復帰したが，蟷螂山は居祭りとしての参加にとどまった。この間，何度か復活を試みるも失敗し，実際に復興するのは百十年も経過した 1981 年のことであった。御所車ほか一部の残存する懸装品を除く多くのものはこの昭和の復興時に新調された。現在は暗渠になっているが，かつて蟷螂山町には西洞院川が流れ，良質であったことから染色の職人たちが数多く居住していたという歴史から，復興の際に人間国宝の京友禅作家羽田登喜男氏によって胴掛，水引，見送りが制作されたため，蟷螂山は「平成の友禅山」の別名を持つ。

ちなみに，羽田登喜男氏は一連の友禅の懸装品の制作にあたり，生地と堅牢度の高い染料に特に留意し，多くの染料を試して色の退行を実験した。7 月にある祇園祭の山鉾巡行は，梅雨明けの炎天下であり，直射日光，多湿と，染色品にとっては大変厳しい条件でもある。今後，祇園祭の山鉾の懸装品をできるだけ色褪せにくい染料をつかって美しく保ち続けたいという思いから，当時では最良の品質であったヨーロッパの 3 社の染料を用いて懸装品の制作を行っている[viii]。

以下，一部は繰りかえすことになるが蟷螂山に由来する事項を項目別に詳細に説明を加える。

4－2　四條隆資卿と男山の戦い

蟷螂山の創立は，四條隆資卿からはじまる。四條隆資を輩出した四條宮は，四条西洞院上る，現在の蟷螂山に居を構えていた下級公家である。四條隆資卿は（1292-1352 年）は南北朝時代，正中の変（1324 年）において，日野資朝らと共に討幕の計に参画し，後醍醐天皇を笠置臨幸に供奉した。南北両朝分裂後は南朝の後醍醐天皇に従い，吉野に赴いたが，男山八幡にて足利義詮軍と戦い，壮絶な戦死を遂げ，公家でありながら六条河原で晒首にされた。

次項で紹介する隆資卿の死後に室町幕府に呼ばれて上洛し，四条西洞院上るの地に拠を定めた渡来の中国人，陳宗奇は，隆資卿の 25 忌に施主となり，法要を行い，山鉾巡行の際に四條家より譲り受けた八葉の御所車に蟷螂の模型を乗せ巡行に参加したのが蟷螂山のはじまりと言い伝えられている。

現在の蟷螂山には，御神体は明確には伝承されていない。しかし，蟷螂は隆資卿の化身であり，蟷螂山には隆資卿の鎮魂，御霊休めの意味が深く込められている。

時には無謀な戦と見られても，人には守らねば

写真 5　正平塚にある四條隆資卿の墓（八幡市男山）

2019 年 6 月 9 日　筆者撮影

ならない信念があり，戦わなければならない場面がある。都であったゆえに，京の町衆は常に政治の影響をまともに受け続けてきた。蟷螂山の故事は，時の権力に勇敢に立ち向かう町衆の心意気を具現化し，勇気を奮い立たせる力を与える故事となった。

近年，京都府八幡市の市民グループによって，その存在を忘れられていてジャングルのようになっていた四條隆資卿とその家臣を祀った墓が発見された。まさに四條隆資卿が男山の戦いで戦死した場所である。その後，有志の市民により四條隆資卿研究会が発足し，隆資卿の弔いが行われるようになり，蟷螂山保存會とも交流を深めている。

4－3　台州出身の渡来人 陳宗奇・陳延祐から 25 代 外郎藤右衛門

前述したように「蟷螂山」は，宋末期に渡日した中国人，陳宗奇が中心となって創設された。陳宗奇は，現在の中国浙江省台州市出身であり，陳家は台州で 1400 年以上続いた公家の出身と伝承されている。

陳宗奇の父である渡日初代，陳延祐（諱名 宗敬）は優れた医師であり，元の順宗皇帝の時代に朝廷の任命で大都に赴任し，当時の礼部である員外郎[ix]という官職を勤めた。明の侵攻によって元朝が滅亡した際に，陳延祐は二朝に仕えることを恥じ，1368 年，陳延祐・龍親子は博多に到着した。

幕府からは，京都へ上り仕えるようにとの遣いが度々寄越された。元朝と明朝の二朝に仕えることを恥じて日本へ渡った延祐がこれを受け入れることはなく，誘いを断り続けた。1370 年，崇福寺の無方和尚から受戒を受け，これ以後延祐は台山宗敬，龍は陳外郎大年宗奇と名乗った。陳延祐は，医術卜筮に詳しかったため日本でも重用され，当時の最高権力者であった室町幕府の将軍，足利義満によって京都に招かれた。1373 年，息子の陳宗奇が京都に転居し，四条西洞院北東角に居を構え，室町幕府の典医や外国信使の接待，諸制度の顧問として活躍をした。

当時，祇園会は 500 年以上の歴史を有しており，室町期にはすでに山鉾巡行が賑わっていた。山鉾は町単位で所有し運営されるのだが，陳宗奇が居住した町は山鉾を有していなかった。1376 年，四條隆資卿の 25 忌に陳宗奇は施主となり，四條宮家から払い下げを受けた御所車に蟷螂の模型を乗せて四條隆資卿への弔いの意をこめて巡行に初参加した。以後，町は蟷螂山町という呼称で呼ばれるようになり，蟷螂山町は山の創始者である陳宗奇の故事が現在に至るまで伝承されている。

1467 年に始まる応仁の乱から戦国時代へと突入し，京の町は荒廃した。陳家は，日本では元朝時代の役職名にちなんで，外郎（ういろう）という姓を名乗った。1504 年，5 代目外郎定治は，有力な戦国武将である北条氏に請われて小田原（現在の神奈川県小田原市）へと転居した。現在は 25 代の外郎藤右衛門氏が当主を継ぎ，小田原で一子相伝の薬とお菓子のういろうを販売している。

外郎家の歴史について山名美和子氏が執筆した小説『ういろう物語』をきっかけに，祖先である陳外郎が創設した蟷螂山のことを知り，2005 年，外郎家の末裔である外郎佐喜子氏が蟷螂山町を訪れた。蟷螂山町では外郎家の歴史が伝えられており，当時の保存會会長であった町衆が，はじめて外郎氏の末裔と会った際も「外郎さん来られたー」いう既知の感覚であったという。以後，外郎家と蟷螂山保存會の交流は再開し，外郎家は，蟷螂山の維持および巡行に多大なる貢献をしつづけている。

4－4　遠州森町 山名神社祇園大祭 蟷螂の舞 伝播する祇園祭と小京都

遠州森町（静岡県周智郡森町）の山名神社に，京都祇園祭蟷螂山で舞われていたという舞楽「蟷螂の舞」が伝承されている。この遠州飯田山山名神社祇園祭の舞ものは，摂津国天王寺から伝承したと山名神社の指南書には記されており，1982 年に国指定重要無形民俗文化財に指定されている。

1660 年ごろ，外郎家 5 代目定治が北条早雲の招きにより東国へ赴き，その途次に西楽寺に出入りし，祇園執行願成寺天王社の祇園会に八初児，獅子とともに蟷螂など八段の舞を伝えた。応仁の乱以前の京都祇園御霊会に舞われた芸能を，室町時代，永正の初め頃（1504 年頃）に遠州太田川

筋の宇刈郷西楽寺が執行する祇園会に取り入れられ，囃子に合わせてカマが動くからくりの蟷螂の被り物をして舞う。15 世紀後半には，巡行に蟷螂 20 匹が群行したとの伝承が森町に残されている。

森町は今，「遠州の小京都」と呼ばれる。小京都とは，狭義では「全国京都会議」[x] に加盟する市町のことを称し，近年は観光資源として広く活用されている[xi]。

山名神社の祭礼は，7 月 17 日に近い週末に催行される。クライマックスには，蟷螂之舞が舞われる能舞台の周囲を，勇壮なお囃子を奏でた屋台が周回する。神社の境内は，静と動の躍動が融合した空間と化し祭礼はクライマックスを迎える。

4－5　江戸時代久留米にあった祇園山とからくり祭り

江戸期，久留米藩有馬家の京都屋敷が蟷螂山町の西側にあり，蟷螂山の山鉾行事を担う大スポンサーであった。現在はほぼ途絶えてしまったが，江戸期には久留米城の城下町にて町人による華麗で活気あふれる祇園会の祭礼が催されていた。

元々，久留米城の外郭に位置するところに貞観年間に開基された祇園社があった。江戸期 1621 年，筑後国に入った初代有馬豊氏は久留米城を築城，城下町建設を開始し，荒廃した社殿を修復した。

筑後国有馬家藩邸が蟷螂山町に居を構えたのは 1660 年頃と伝えられている。祇園会が久留米に現れるのはそれより少し前，1647 年，二代藩主忠頼のときである[xii]。久留米町中氏子により，かつてあった神幸の再興が申し出られて，御旅所と御輿屋と拝殿を建立，城内の祇園社から御旅所への御神幸が行われた。1694 年には祇園山と呼ばれる久留米の「山鉾巡行」が再興された。例年陰暦 6 月 7 日に城内の祇園社を出発して神幸がはじまり，14 日還幸が行われた。神幸の際には，城下から繰り出される通物と呼ばれる豪華絢爛な曳山，笠鉾，神輿が笛や太鼓のお囃子とともに練り歩いた。山の上には能・狂言の一場面がしつらえられた。『久留米祇園祭礼図』には，「糸繰山」「万歳山」「蓬莱山」「養老」などの風流で飾られた屋台を曳いている図がみられる。絵巻には描かれていないのだが，「牡丹山」の風流は，能の名曲「石橋（しゃっきょう）」を題材にしたもので，中国の清涼山についた寂昭法師の奇瑞な経験を題材として作られている。

これらの山は豪華絢爛で，宝暦年間には御旅所で芝居興行が行われ，祇園会の祭礼は久留米町全体を祭り一色に塗りつぶした。御旅所では見世物，歌舞伎，浄瑠璃や三味線興行など，さまざまな芸能演目が行われて賑わった。祭礼の 14 日には，町人も城内の祇園社に立ち入ることが許された。

また春秋に催される五穀神社の祭礼の作り物に

写真 6，7　遠州飯田山名神社祇園大祭

2019 年 7 月 14 日筆者撮影

図表 2　久留米祇園会田鍋屋掛『養老』

出所：『久留米城下町と祇園会』

はからくりが多用された。安永 2 年の記録には，祭礼の作り物には 6 つのからくり仕掛けが見られたことが記録されている。

このように 18 世紀後半の久留米には高度なからくり技術と知識が定着していた。蟷螂山は山鉾で唯一のからくりをもつ。当時のからくり技術の伝播については，さらに詳しく研究する必要があるが，有馬家の京都藩邸を通じて久留米城下の祭礼に伝播した可能性が極めて高いと考えられよう。

現在，確認できるところでは，1844 年まで盛大な祇園会が続いている。しかし幕末弘化の大倹令から明治の廃仏毀釈（神仏分離）によって往時の華麗さを失った。現在は消滅しており，幻の祭りとなっている。

現在，祇園社があった場所には篠山祇園神社があり，集会所，本堂が建っている。敷地内にはささやま保育園が建設されて，境内は園庭として遊具がおかれ，神社の参拝には保育園の門をあけて入らねばならない。

一方で久留米のからくりは地域活性化の資源として定着している。JR 久留米駅前広場には『からくり太鼓時計』があり「からくり儀右衛門」こと久留米出身の東芝の創業者，田中久重が製作した『太鼓時計』をモデルにしたものである。

この田中久重だが，江戸後期，久留米藩の城下・通町に，鼈甲細工師の長男として生まれた。鼈甲細工は精密な工芸で，その技術を目の当たりにして育った久重は幼い頃から発明の「虫」で，わずか 9 歳で最初のからくりを作成したという[xiii]。久重が生まれ育った幕末，からくり人形は各地で興行されている庶民の娯楽で，久重の家の近くにある五穀神社の祭礼では，老若男女が仕掛けで動く人形を楽しみにしていたといわれる。久重もその精妙な動きに心を奪われ，寝る間を惜しんで考案と製作に没頭した。後に，からくり興行師として大阪・京都・江戸などをまわり，修行を重ね，水力を利用した久重のからくり人形は大変な評判を呼び，「からくり儀右衛門」との名が広まった。1873 年，久重は久留米から上京，2 年後に東京・銀座に東芝の前身を創業する。

久留米のからくりは現在，昭和の復興時に蟷螂山を制作した名古屋の玉屋庄兵衛がメンテナンスを行なっている。蟷螂山と久留米の祇園山，五穀神社のからくりとの関係などは今後，引き続き久留米藩の古文書の解読等の研究が必要となる。しかし，からくりの技術の伝播から新たなイノベーションが生まれ，東芝の創業へとつながったことは大変に興味深い[xiv]。

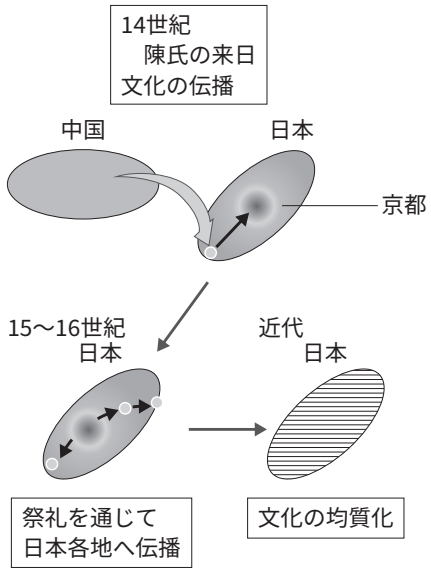
4－6　小括　近代の蟷螂山と伝播の図

ここまで述べた文化の伝播を図式化したものが図表3である。14世紀，中国大陸から渡日した陳外郎大年宗奇が創設した蟷螂山は，陳外郎の末裔により15世紀に遠州森町，16世紀には久留米藩の有馬家から久留米へと文化の伝播がみられる。現在，久留米では祇園会はほぼ消滅してしまったが，遠州森町では蟷螂の舞が今もなお継承されている。

ここまで見てきたように文化が伝播した地域で人々は，「神遊び」を楽しみながら，美しいもの，楽しいものに「共振・共鳴・共感」し，時間や空間をも越境した人的つながりを構築している。そしてその文化的ルーツは中国にある。今後，浙江省台州とのつながりの解明されれば，また新たな縁が紡ぎ出される可能性がある。

明治期以降の近代教育は国民を均質化し，国民国家の境界を固定化してきた。だが実際には文化的媒介者が存在し，さまざまな要素が時空を超えて影響を受け合っている。それにもかかわらず国民国家の旗印の下，文化の「所属」を明確にしようとする力学が働き，日本固有の文化というものが，あたかも存在したかのように扱われてしまう。祇園祭を丁寧に見ていくことで，日本という島国が外来の文化をうまく取り入れながら土着のものと結びついて構築されてきたことがよく理解できるだろう。

図表3　祇園祭蟷螂山につながる文化の伝播の模式図



出所：筆者作成

5　まとめ　還流する文化と トランスカルチュアリズム

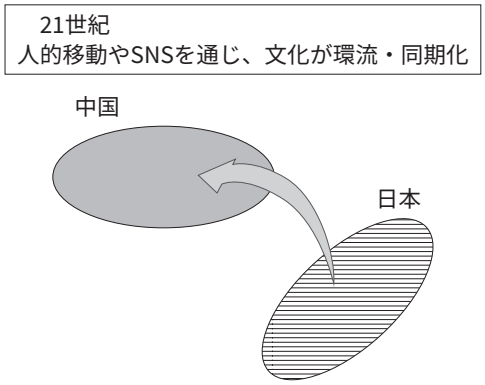
20世紀後半から21世紀にかけてのグローバル化とIT技術の進化により，日中間で情報が即座に同期化されることとなった。

中国の日本通の間で広く読まれている雑誌に『知日』がある[xv]。“It is Japan”をキャッチコピーに掲げ，中国人の若者が，中国人の目線に立ち，中国人のために作る「日本専門誌」で，毎号特集テーマとして，メカ，日本の文具「手帳」，日本酒や禅から，山口組，鉄道の旅や萌文化，笑いのツボまで，毎号硬軟織り交ぜたテーマを定めて日本文化を深く掘り下げて伝えている。

この雑誌『知日』の「禅」の特集号には下記の言葉が綴られている。

20世紀80年代以降，中国人は儒教，道教，仏教や禅の思想を再認識する。それらの多くは「逆輸入」されたものである。我々（中国人）は，それらが日本やアメリカで多大なる影響を持つのを知り，ようやく注目し，重視しはじめる。そうして，これらに貫かれている華夏民族数千年の文化的血脈を，再度，紡ぎ始めるのだ（2017:67筆者翻訳）。

図表4　21世紀，SNS時代の文化の伝播の模式図



出所：筆者作成

日中韓の3カ国にはどこか懐かしいものがいたるところに存在している。日本観光庁2017年統計「訪日外国人旅行者の訪日回数と消費動向の関係について」の調査[xvi]では，日本滞在中の行動で次回の来日時に歴史・伝統文化体験を期待する中国人旅行者の割合は，初回来日者では16%から，訪日後に24%まで上昇している。

中国と海を隔てた島国の日本は，遣隋使など優秀な人材が，命を賭した航海を行い，艱難辛苦を乗り越えて，大陸からの先進的な思想や文化や技術を学んできた。中国からも祇園祭蟷螂山を創立した陳延祐のように，さまざまな理由によって日本へと渡日し，日本社会において活躍し中国文化の伝播に多大なる貢献をした人材が存在している。このような数多くの文化的媒介者の存在により日本には，中国からの莫大な英知や美が脈々ともたらされてきた。

本稿の事例においては，14世紀に中国から渡日したある文化的媒介者の存在とその子孫の活躍を通して，交流の中に埋め込まれた中国文化をみてきた。文化は，祭礼という形態をとりながら日本各地に伝播している。そうしてそれらは，日本の各地の風土や土着の信仰と融合し，新たな地方「独自」の伝統文化として創新され，地域によっては消滅しつつも，現代にまで継承され続けている。文化を再認識することは，日本文化の固定化を打破し，現在へと連なる文化的越境の視点を提供する。本稿は，日本文化の固定化を乗り越えるトランスカルチュラルな位相を検討する事例となる。

西原は，「国民文化」やそのもとでの集合的文化の固定化を乗り越えるトランスカルチュラル（脱文化的）な視点に立つこと，またそのための文化的媒介者の重要性を指摘する（西原 2018: 291）。本稿の事例では，現代まで綿々と続く日中の文化的越境を再確認するだけではなく，新たな文化交流とトランスカルチュアリズムの可能性を探る端緒となるにちがいない。

後注

i）京都市情報館（2016）「文化庁の京都移転決定」https://www.city.kyoto.lg.jp/sogo/page/0000195679.html,（2021年11月11日アクセス）

ii）近年，東日本大震災を契機に，東北地方を襲った1000年に一度の大震災である貞観地震の知らせが都に届き，祈念したのではないか，という説がある。

iii）「町衆」は「まちしゅう」と呼ばれることもあるが，これは1964年，京都大学文学部史学科教授であった林屋辰三郎が町衆研究において「まちしゅう」と呼んだことから広く呼ばれるようになったが，実際に古くからの京の町衆からは「ちょうしゅう」としか呼ばれることはない。

iv）植木行宣（2001）『山・鉾・屋台の祭り』白水社

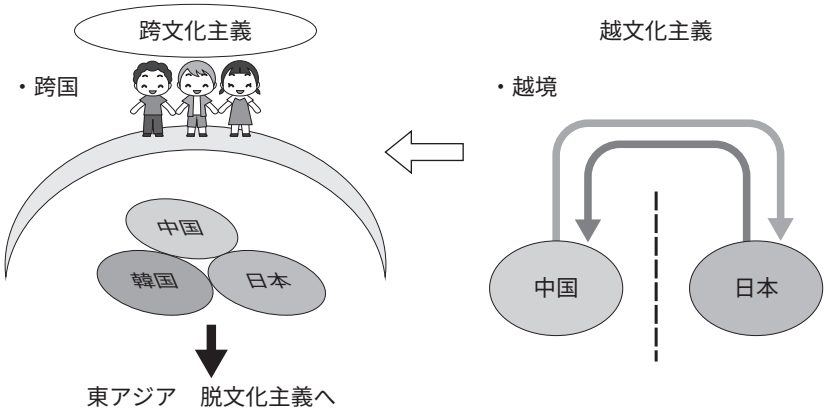
v）中村圭（2021）「マンション町衆が紡ぐ山鉾町の伝統―京都祇園祭 蟷螂山」牧野修也編『変貌する祭礼と担いのしくみ』学文社

vi）松田元編画（1977）『祇園祭細見』京を語る会

vii）昭和の蟷螂山の復興に貢献した津田菊太朗氏がまとめた文書に記載。

viii）後年，EUのバローゾ委員長が京都を訪れた際にこのエピソードを聞いて感銘を受け，ヨーロッパ製品が日本

図表5　東アジア脱文化主義への模式図



出所：筆者作成

の伝統文化に貢献できたことに対して非常に嬉しいと語っている。

ix）員外郎という官職は当時の礼部に属し，儀式と教育を扱った役員であり，異国の客や接待や留学生の世話役を勤めた。員外郎は役所の中でも第四に当たる高官でもあった。

x）小京都とは，古い町並みや風情が京都に似ていることから，各地で名づけられたまちの愛称で，近年の観光資源開発と深く関係がある。その地域の文化資源は，室町時代以降，各地の大名が京都を模倣したまちづくり（都うつし）をしたことに起源を持つ。「全国京都会議」は，1985 年に，京都市をはじめとする 26 市町により結成され，「小京都と京都ゆかりのまち」の PR や文化の掘り起こし策などの協議をおこなっている。1988 年の第 4 回総会において，全国京都会議への加盟基準が定められ，その 1 つ以上に合致していれば，総会で承認される。

xi）静岡県森町観光協会 遠州の小京都 https://www.mori-kanko.jp（2021 年 10 月 27 日アクセス）

xii）それ以前にも，1534 年，1537 年にも疫病退散などの祭事があった記録が残されている。

xiii）田中久重は 9 歳の時，父の道具で硯箱をつくり寺子屋の仲間に開けさせようとしたが，誰も開けることができなかった。引き出しに紐がつけられ，捻り加減で開閉するという独創的な仕組みであり，『開かずの硯箱』とよばれる。

xiv）現在，蟷螂山保存會と久留米との繋がりは失われている。

xv）「知日」は日本を専門テーマにした中国初のムック誌で，毎号 5 ～ 10 万部の売り上げがある。編集長以下大部分の作り手が，現代の日本文化に関心が深い 1980 年代以降に出生した若者たちである

xvi）日本観光庁 2017 年度統計「訪日外国人旅行者の訪日回数と消費動向の関係について」http://www.mlit.go.jp/common/001230647.pdf（2021 年 11 月 14 日アクセス）

参考文献

秋山國三・仲村研著（1975）『京都「町」の研究』法政大学出版局

鯵坂学・小松秀雄編（2007）『京都の「まち」の社会学』世界思想社

植木行宣（2001）『山・鉾・屋台の祭り』白水社

遠州飯田山名神社祇園祭舞ものパンフレット

小松秀雄（2008）「祇園祭の山鉾町のアクターネットワークと実践コミュニティ」鯵坂学・小松秀雄編『京都の「まち」の社会学』世界思想社

京都市芸術大学日本伝統音楽研究センター第 49 回公開講座「地方に息づく京都祇園祭の芸能―遠州森町山名神社の舞もの―」2017 年 9 月 17 日（於：京都市男女共同参画センターウイングス京都）

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課編（2011）『写真でたどる祇園祭山鉾行事の近代』京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課編

久留米教育委員会文化財保護課（2000）『第 10 回企画展　久留米城下町と祇園会―描かれた祭りと人々のくらし―』久留米市教育委員会

品田悦一（2019）『万葉集の発明―国民国家と文化装置としての古典』新曜社

品田悦一（2020）『万葉ポピュリズムを斬る』短歌研究社

古賀正美（2018）『久留米城とその城下町』海鳥社

玉村禎郎（2018）「祇園祭の山鉾に見る外国文化受容の 2 類型」『杏林大学外国語学部紀要』第 30 号, 杏林大学外国語学部

中信出版集団（2017）「特集日本禅」知日 MOOK, 中信出版集団

電通編（2018）『2018 祇園祭』（公社）京都市観光協会・（公財）祇園祭山鉾連合会

中村圭指導担当（2013）『同志社大学社会調査実習報告書』同志社大学社会学部社会学科

中村圭指導担当（2016）『同志社大学社会調査実習報告書』同志社大学社会学部社会学科

中村圭（2021）「マンション町衆が紡ぐ山鉾町の伝統―京都祇園祭 蟷螂山」牧野修也編『変貌する祭礼と担いのしくみ』学文社

中村圭（2022）「京都祇園祭 あふれかえる観光客―オーバーツーリズムに対抗する山鉾町と町衆」同志社大学経済学部『経済学論叢』第 73 巻第 4 号

西原和久（2018）『トランスナショナリズム論序説――移民・沖縄・国家』新泉社

林屋辰三郎（1990 = 1964),『町衆』中公文庫

深野彰編著（2016）『「ういろう」にみる小田原』新評論

松田元編画（1977）『祇園祭細見』京を語る会

森谷尅久（1978）『町衆から町人へ』日本放送出版協会

山田浩之（2016）『都市祭礼文化の継承と変容を考える』ミネルヴァ書房

山名美和子（2010）『ういろう物語』新人物往来社

参考 URL

株式会社ういろう HP，http://www.uirou.co.jp（2021 年 11 月 14 日アクセス）

京都市情報館（2016）「文化庁の京都移転決定」https://www.city.kyoto.lg.jp/sogo/page/0000195679.html,（2021 年 11 月 11 日アクセス）

静岡県森町観光協会 遠州の小京都 https://www.mori-kanko.jp（2021 年 10 月 27 日アクセス）

日本観光庁 2017 年度統計「訪日外国人旅行者の訪日回数と消費動向の関係について」http://www.mlit.go.jp/common/001230647.pdf（2021 年 11 月 14 日アクセス）

映像資料

京都市・財団法人山鉾連合会制作（2007）『京都祇園祭の山鉾行事』

NHK 制作（2011,7,16 放映）『NHK スペシャル京都が一番暑い夜・生中継・祇園祭宵山』

NHK 制作（2014,7,23 放映）『NHK スペシャル京都 祇園祭 千年の謎』

添付資料

祇園祭 蟷螂山 歴史年表

年号	西暦	蟷螂山に関する出来事	久留米
	501 ～ 531	昭明太子（「梁」武帝の長子）『文選』　蟷螂の斧の故事	
大治 3 ～文治 2	1128 ～ 1186	中御門家成の長男隆季，四条大宮に院を構える。 後に四条西洞院に移転「四條宮」	
正応 5 ～正平 6	1292 ～ 1352	四條隆資卿　正平 6（1352）年 5 月 11 日　足利義詮軍と男山で戦い戦死	
正平 22	1368	**陳延祐（宗敬），陳大年（宗奇）父子　元の侵攻により大都から博多へ**	
文中 2	1373	**陳大年，博多から京都へ移転**	
永和 2	1376	岡崎 善勝寺にて四條隆資卿の 25 忌大法会。**陳大年施主** 蟷螂山 祇園祭山鉾巡行に初参加	
応仁 2	1468	応仁の乱　蟷螂山焼失	
明応 9	1500	巡行復活　鬮定次第	
正保 4	1647		久留米祇園会始まる（神輿渡御）
万治 3	1660 ～	**5 代 外郎定治　小田原に移住　途中，遠州森町にて蟷螂之舞 伝授** 久留米藩 有馬屋敷 蟷螂山町に移転	
天和 2	1682		藩主祇園会上覧，恒例に
元禄 8	1695		祇園山始まる
宝永 3	1706		祇園会踊山始まる
正徳 4	1714		祇園会傘鉾始まる
安永 2	1773		五穀神社に 5 つのからくり作り物出現以後，久留米にからくり技術が定着
天明 8	1788	天明の大火　蟷螂山焼失	
享和 2	1802	御所車新調（現存）	
元治 1	1864	禁門（蛤御門）の変　蟷螂山一部 焼失	
明治元～ 2	1868 ～ 1869	（明治維新）（神仏分離令）	
明治 9	1876	焼け残った御所車を座敷飾りに作り変えて祭祀 居祭りに参加	
昭和 17 ～ 24	1942 ～ 1949	（第二次世界大戦 祇園祭山鉾巡行　中断）	
昭和 25		（祇園祭 山鉾巡行復活）	
昭和 45 頃	1970	町内での御所車の保管場所探し開始	
昭和 52	1977	9.15 蟷螂山修復委員会　設立	
昭和 53	1978	4. 1 修復委員会から蟷螂山保存會に	
昭和 54	1979	6.29 御所車・蟷螂絡繰り復元・八坂神社にて入魂式	
昭和 56	1981	7.17 蟷螂山再興 約 110 年ぶりに山鉾巡行に復帰	
昭和 57	1982	羽田登喜男制作 懸装品 前掛 完成	

年号	西暦	蟷螂山に関する出来事	久留米
平成 3	1991	（復興 10 年）羽田登喜男制作 懸装品 見送完成	
平成 13	2001	（復興 20 年）仮設展示場 完成	
平成 14	2002	蟷螂山収蔵庫 完成	
平成 15	2003	蟷螂山町會所 完成	
平成 16	2004	羽田登喜男制作 懸装品 後掛 完成（一連の京友禅懸装品が完成）	
平成 21	2009	**外郎家との交流復活**	
平成 23	2011	（復興 30 年）**外郎家 山鉾巡行に復帰**	
平成 26	2014	（祇園祭 前・後祭の復活）　蟷螂山は前祭に巡行	
令和元	2019	四條隆資卿研究会 発足	
令和 2	2020	コロナで居祭り	
令和 3	2021	（復興 40 年）コロナで居祭り　山建は実施 **25 代 外郎藤右衛門 正使を勤める**	

出所：資料を元に筆者 作成　2021 年 11 月